

## 訳語の難しさ

東洋大学大学院客員教授 依田 俊伸

外国語の文章を日本語に訳すのは、本当に難しい。学者の論文の文章は論理的に書かれているのだから、逐語的に訳していけば、自ずと日本語としても筋の通った文章になるはずであるとの甘い期待の下で訳してみてもしっくりこない。読解能力が低いために、原文を読んでいてもこの文章はこういうことを言っているのだと、胸にストンと落ちるような読み方が出来ないのだから当たり前かもしれない。最近、コンピューターのAI翻訳機能を使って英語の文章を訳してみたが、同様に今一つである。やはり古くから言われているように、文章を深く読解するためには、前後の文章に注意を払いながら、当該文章により筆者が言いたいことを探り、感じ取っていかなければならない。それは、日本語の文章であろうが外国語の文章であろうが変わりはない。ただ、外国語の文章の場合は、それを日本語の文章に言語化しなければならないのが難しいところである。その作業は文章の中の単語・語句の訳から始まる。単語であるから辞書的な訳語はすぐ見つかるが、それではしっくりこない。辞書的な意味からはそれほど外れずに、筆者がその語句に込めた意味を汲み取れるような訳語にするにはどうしたらよいか、という難行苦行が始まる。

会計学の領域における理論的な枠組みを示す概念として「収益費用アプローチ」「資産負債アプローチ」というものがある。これは、1976年に米国の財務会計基準審議会から公表された『討議資料』(FASB Discussion Memorandum, *An Analysis of Issues related to Conceptual Framework for Financial Accounting and Reporting: Elements of Financial Statements and Their Measurement*)で述べられた概念であり、原文では、“revenue and expense view” “asset and liability view” という語句が使われている。公表当初の翻訳では、「収益費用観」「資産負債観」とか「収益費用利益観」「資産負債利益観」のほかに「収益費用アプローチ」「資産負債アプローチ」等いくつかの訳語が使用されて今日に至っている。この概念は、企業利益を導き出す理論体系として「収益費用」を基礎として考えていくのか、それとも「資産負債」を基礎として考えていくのかという違いを明確に対比する概念である。「討議資料」の公表後は、まず、原語を逐語的に訳した「収益費用観」「資産負債観」の語句が使われた。しかし、「観」(view)という語だけではその内容が分かり難いところから、原語には「利益」という語はないが「利益観」という語にして「収益費用利益観」「資産負債利益観」という語句が使われるようになった。今日でも上記2種類の語句は使用されているが、広く眺めてみると「収益費用アプローチ」「資産負債アプローチ」が人口に膾炙しているように思われる。確かに原語には「アプローチ」という語句は存在しないが、収益費用または資産負債を基礎として企業利益を導き出していく考え方を示す語句として「アプローチ」という語は、イメージが湧きやすく、しっくりくると思われる。私も「収益費用アプローチ」「資産負債アプローチ」という語句を使用している。このような例をみると、外国語、特に専門用語を訳すときには、その語句の内容、イメージをより明確にできるならば、原語にない語句であっても補足的に追加しても良いのではないかと思ってしまう。

ところで、領域は少し離れるが、税の世界で「タックス・プランニング」という語句がある。これは、tax planningの訳であるが、すでにこの領域では「タックス・プランニング」という語句が広く普及しており、それに対抗し得るような訳語はあまり見当たらない。「租税計画」「税務計画」という語句の使用が散見される程度である。「タックス・プランニング」とは、概して、企業経営者が企業活動を遂行する際に租税の支払いを減少させることを計画することとすることができる。「タックス・プランニング」「租税計画」「税務計画」はいずれも逐語的な訳に止まり、「租税の支払いの減少」というニュアンス、イメージを欠いている。そのニュアンスを表現できるような訳語を考えたいと思っはいるが、難しい。